

シメオンの信仰

ルカによる福音 2:22-32

さて、モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はその子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った。それは主の律法に、「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」と書いてあるからである。また、主の律法に言われているとおりに、山鳩一つがいか、家鳩の雛二羽をいけにえとして献げるためであった。そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。シメオンが“霊”に導かれて神殿の境内に入って来たとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た。シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり／この僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、／あなたの民イスラエルの誉れです。」

父と母は、幼子についてこのように言われたことに驚いていた。

シメオンは彼らを祝福し、母親のマリアに言った。「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。——あなた自身も剣で心を刺し貫かれます——多くの人々の心にある思いがあらわにされるためです。」

説教

いぜん友だちと無駄話をしていたらお遍路さんのことになって「遍路乞食」

のことを知りました。かれは私より年上の先輩なのですが四国の出身です。小さいころ（50年以上も前）お遍路さんが怖かったといいます。なぜと聞いたら、汚い風体でモノ貰いをしながら念仏唱えているからと怖かったといいます。わたしはお遍路さんはある種の求道者だと思い込んでいたのでちょっとびっくりしました。お遍路さんは行き場のない人たちだから近寄るなと先輩は親からいわれていたそうです。

ところでシメオンは聖霊に導かれて神殿境内にはいったと書いてありますが、メシアが生まれたなら必ず神殿詣でをするから、毎日エルサレム神殿をチェックしていたらメシアに会えると作戦を立てていたのかもしれませんが。シメオンは神官だったとは書いていないので、もしかしたら言い方は悪いですが「神殿こじき」みたいな方だったかもしれません。

ある人が過ちを犯し、そのつぐないのために歩き遍路（遍路乞食）になったとします。彼（彼女）の遍路の目的は赦しを得ることになります。赦しを得たら終わることができる、言い換えれば死ぬことができます。死んでも死にきれないではなく、赦されたので死に切れる状況になります。

シメオンはメシアに会うまでは死ぬことができませんでした。

そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。ルカ 2:26

シメオンは聖霊のお告げ、聖霊体験から神殿詣に至ります。神体験から信仰という順番です。その一方で歩き遍路さんの場合は逆になります。信仰（歩き遍路）から神体験（赦し）へという順番となります。

たまたま宝くじを買ったら1億円当たった、20年間毎週宝くじを買い続け

たら1億円当たった。気まぐれで買ったくじが当たる、すごいことです。熱心に買い続けた宝くじが当たった、これもまたすごいことです。

エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。ルカ2:25

シメオンは「正しい人で信仰があつい」と言われています。なぜシメオンは正しいのか、それには聖霊が関係しています。彼は「お告げ」という聖霊体験をしています。それゆえに信仰があつくなったのです。宝くじの話でいえばたまたま買ったくじが当たったようなものです。

でも噂によればくじに当たった人は幸福になるより不幸になるケースが多いそうです。シメオンも「お告げ」を受けたのでメシアに会うまでは死ぬことができなかつたと説明されています。シメオンが何歳だったか聖書は証言していないので不明ですが、ひょっとしたら想像を絶するような年寄りだったかもしれません。もしそうだとすると、シメオンは相当つらい想いをしていたのかもしれません。

信仰をしていると喜びばかりではなくつらくなることもあります。どちらかといえばつらいというのが多くの人の実感でしょう。でもこのまま信仰を続けていけば必ず報われる、救いがくるとおもうのは「ワナ」かもしれません。シメオンが「正しい」とされるのは「お告げ」を受けているからです。聖霊体験のゆえに信仰をしているので「正しく信仰にあつい」とされているのです。シメオンは「赦し（死ぬこと）」を求めて信仰しているのではなく、お告げを信じて信仰しているのです。体験から信仰、信仰から体験、どっちでもいいじゃん、ではなく体験あつての信仰でないと自分自身に迷うことになります。

イエスさまの誕生から40日を迎えたきょう「主の奉獻」の主日にわたした

ち一人ひとりが主に出会った経験（体験）を思い起こし新たにすることが
できますように。
